

ゆいちゃん は シリタガリン!! どうしてお経を読むの? 星オレイ



浄土宗コドモタイムズ

第36号

発行
浄土宗児童教化連盟

発行人
辻本 良明
〒857-0851
佐世保市稲荷町19番
10号 善隣寺内
TEL 0956-33-3334
FAX 0956-33-3338



「外来語を漢字に当てました」

かんじ

やあ、シッタカおじさんだよ。外来語って知っているかな？

これはもともと外国の言葉だったものが日本に入ってきて、すっかり日本の言葉になったものです。そんな外来語を漢字に当てたものを紹介しよう。

1. 外来語の音をそのまま漢字に当てたもの

- クラブ→倶楽部
- カタログ→型録
- ロマン→浪漫
- カルタ→歌留多
- カップ→合羽
- ゴム→護謨
- ギャラリー→画廊
- てんぷら→天麩羅
- ジョーク→冗句
- ジョウロ→如雨露
- バケツ→馬穴
- ヒアシンス→風信子
- メートル→米突
- レモン→檸檬

2. 外来語の意味を漢字にあてたもの

- アイスクリーム→氷菓子
 - アコーディオン→手風琴
 - オルガン→風琴
 - ピアノ→洋琴
 - オルゴール→自鳴琴
 - ハーモニカ→口風琴
 - ギター→六絃琴
 - ハープ→豎琴
 - バイオリン→提琴
 - コスモス→秋桜
 - コンパス→円規
 - ビール→麦酒
 - ヨット→快速船
 - ランプ→洋灯
 - ハンカチ→手巾
 - サボテン→仙人掌
 - スープ→肉汁
 - テニス→庭球
- 知っている漢字もあれば、へえー初めて見たという漢字もあると思います。外国の言葉をどうにかして漢字に直そうという昔の人の苦労がわかりますね。



質問

お寺にある仏像はどうやって作られているの？

(大西れん 小六)

答え

仏像は、木とか、石とか、金属とか、いろいろな材料で作られているけど、一番

多いのは木を彫って作られた仏像なんだよ。れん君はどうやって彫っていると思う？

「ん、機械で彫ってる？」

「そうだね、機械のほうで簡単そうだね。でも、人の手で、

のこぎりや、ノミや、彫刻刀を使って彫っているんだよ。」

「ええ？ 大変だね！ どんな木で作られてるの？」

「では、これから木から仏像がどうやって作られているのか、材料の木や作り方について、お話ししよう。」

中国にある仏像の作り方が書かれた古い本（経典）には、「仏像は白檀を使って作りやすい。白檀がない所では、柏樹を使ってもよい」と書かれていま

す。白檀は、インドにある良い香りの木で、柏樹は、ひのきに近い針葉樹です。日本にはどちらも無いので、柏樹に似た、ひのき、榧の木、桜、赤松などを使いました。飛鳥時代から平安時代の始め頃は一本の丸太の状態から仏像を彫る一木造りが主流でしたが、平安時代の中頃からは、丸太を四角に製材した角材を使う様になりました。その頃から、阿弥陀様の教えを信じる人たちが増えてきました。特に貴族は皆、仏師という仏像を彫る専門家に頼んで、阿弥陀様の仏像を作り、手を合わせました。おかげで、たくさんの阿弥陀様の仏像が作られたのです。材料には、手に入りやすく、削りやすいひのきが多くなりました。平安時代の終わりの頃になると、多くの貴族は、もっと大きな阿弥陀様を作りたいと考えました。

そこで、仏さまのお姿を、正確な設計図に描き、そのお体をいくつかのパーツに分けて、作成し、あとでそのパーツを組み合わせる、寄木造りという方法が考えだされました。この方法は、たくさんの材木を集めて作

るので、一木造りでは不可能であつた大きな仏像も作る事ができ、さらに、大勢の人たちが作業を分担して造る事が出来るため、早く作る事が可能になりました。おかげで二メートルから五メートルもの阿弥陀様が作られるようになりました。有名な、

質問

『江戸時代、お坊さんはどのようにして北海道まで来たのですか？』 (北海道 女子)

答え

いま東京から北海道まで飛行機で一時間半で簡単に行く事ができます。電車や車で移動しても十七時間、だいたい一日あれば間に合います。ところが、江戸時代には飛行機も無ければ電車・車も無い時代です。そんな時代にどうやって北の果てまでやって来たのでしょうか。今から二百年前の話です。実は江戸から北海道の函館まで行くのに、だいたい三十日かかり

宇治平等院の阿弥陀様もその一つです。最初に言いましたが、木の種類も色々な材料で仏像は造られています。どんな材料の仏像でも、みなありがたい仏様です。お寺で仏像と出会ったら、しっかりお参りしましょうね。

ました。江戸の日本橋から始まる日光街道を通り、さらに福島・宮城・岩手・青森の四つの県を縦に走る奥州街道を進み、青森の下北半島の佐井まで約九百kmを自分の足で歩きました。一日にだいたい八里（約三十km）歩きます。朝八時に宿を出て夕方五時まで、その晩泊まる宿まで歩くのです。草鞋を履いての歩き旅で足にかなりの負担がかかりました。宿場から宿場までの中間で必ず休みをとり、昼食をいただき、足や体を充分休めてから旅を再開したのです。雨の日には草鞋が水を吸って重くなり歩くのが大変だったそうです。時には重たい荷物を馬に運んでもらうこともありましたが、当時の人にとっては歩くことも大切な仕事だったのです。

本州から函館までは船で渡ります。当時の船は帆で風をうけて進むため、いい風が吹かない日は何日も港で待ったものでした。また、いい風を受け船を出すことが出来ても、途中で風向きが変わり目的地に行くことが出来ないこともしばしばありました。このように思った通りにいかない自然まかせの旅を当時の人達はしていたのです。

お坊さんの旅は沢山の荷物を持参してのことでした。お寺を建てた後にお祀りする阿弥陀さまを背負って歩かなければいけません。当然一人では無理です。そこで、数名のお付きの者たちが同行したのです。中には寺侍といって道中の危険なことから身を守ってくれる方も一緒に歩きました。山道では盗賊も出てきて物を奪おうとします。荷物の中にはお金のほかに幕府や増上寺からの大切な書類もありました。海を渡り北海道まで届ける使命がありましたので、命がけの旅だったのです。



「お寺の楽器」

1



木魚

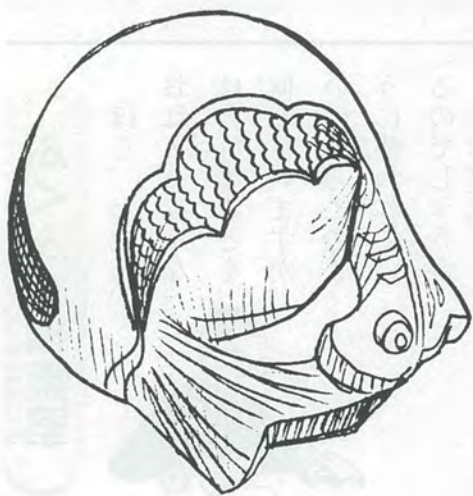
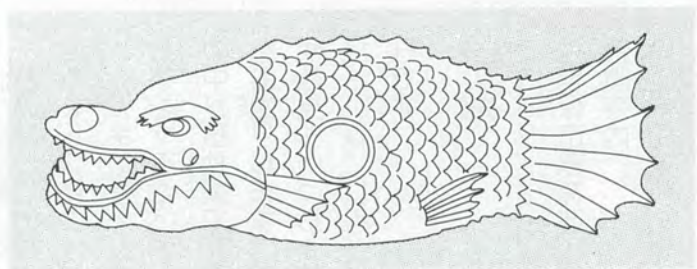
たたかれて 昼の蚊をはく 木魚かな
(たたかれてひるのかをはくもくぎよかな)

夏目漱石

この句は、寺の本堂でお坊さんが木魚をたたくと、昼だというのにあわてて蚊がとび出してきた様子を詠んだものです。木魚は、読経をするときに打ち鳴らすことで、リズムを整えます。また、眠気覚ましの意味もあり、木魚が魚を模しているのは、眠るときも目を閉じない魚がかつて眠らないものだと思われています。

木魚は禅宗や天台宗、浄土宗などで用いられます。浄土宗では木魚の使用が禁じられた時期もあったが、その後念仏を唱えるときに使用されるようになったそうです。

小さな座布団状の台の上に置かれ、先端を布で巻いたバチで叩くと、「ぼくぼく」という感じの音が鳴ります。大きさは直径6cm程度から、1m以上のものまであります。自らの尾を食う魚、二匹の魚や龍が珠を争う姿などを図案化した鈴のような形をしています。表面には魚の鱗が彫刻されています。クスノキなどの木を材料として作られ、内部は空洞にな



っていて、開口部である「響孔」にあたる部分から刃を入れ、中に空洞が作られるのです。

木魚の原型は禅寺で使われていた「魚板」(魚鼓)です。これは黄檗宗の本山である黄檗山萬福寺や護国山東光寺などで見る事ができます。魚板とはその名の通り魚の形をした板であり、現在午前十一時四十五分にだけ鳴らされています。魚の形をしているのは、魚は日夜を問わず目を閉じないことから、寝る間を惜しんで修行にはげみなさいという意味です。そして、口にくわえた丸いものは煩惱を表し、魚の背をたたくことで煩惱を吐き出させる、という意味合いです。そして雑学ですが、眠気覚ましのために一定のリズムを刻んでいたとも言われています。

これも仏教の言葉だよ!

「観察」



理科の時間で朝顔などの植物や生き物などがどのよう
に成長していくか、じっくりと時間をかけて育てた
ことありますよね。その時に「植物を観察する」ある
いは「生き物の動きを観察する」と言いますよね。こ
の言葉は、物事などを注意深く見て、考え、念入りに
調べることに使います。

この「観察」という言葉は、仏教の修行のひとつを
表す言葉で「かんざつ」と読みます。仏様の智慧によ
って対象となるものを正しく見きわめることを意味し
ています。これは、仏の智慧(悟りの境地)があれば、
全ての現象を正しく見ることができるということにな
ります。

阿弥陀様が、西方極楽浄土という私たちの命が終わ
った後にいく大変美しい世界を作りました。その浄土
の阿弥陀様や、その浄土の立派な様子を思い描き、そ
れを観察し、つねに思うことを行としています。

みなさんも夢や希望の世界に向かって進んでいく時、
先のことを心に思い描いて、よく観察し、必ず夢が叶
うと信じてがんばりましょう!

ちがいがし

みんなよう
みん考えよう



塗りムラ、ヨコレは考えない

イラスト 大和美緒



左の絵と右の絵のちがうと
ころを5つ見つけてください。
ハガキに答えを書いて左記
まで送ってください。正解者
の中から抽選で30名に記念品
をお送りします。記事の感想
や意見もいっしょに書いてく
ださいね。しめきりは9月15
日です。

送り先

〒857-0851

佐世保市稲荷町19番10号

善隣寺内

浄土宗児童教化連盟事務局

TEL

0956-333-3334

FAX

0956-333-3338

こた 前回の答え

1. 丘の斜面の流れ
2. 左の木の枝(太さ)
3. タヌキのしっぽ
4. だんごの色(並び)
5. 手前の花の本数

お知らせ

◇みなさんからの記事 wait しています。学校でのこと、家の中でのこと、家族のこと、友だちのことなどを書いて送ってください。またみなさんからの作品も wait しています。絵や作文、お習字など何でもけっこうです。

◇送り先は 〒857-0851 佐世保市稲荷町19番10号 善隣寺内 浄土宗児童教化連盟事務局

TEL 0956-333-3334 FAX 0956-333-3338

感想もいっしょに書いてください。

ぶくぶく編集室



ぼく、わたし、
おれ……。みんな
は自分のことを
何と言いますか。
いつからこのよ
うに使われてい
るのでしょうか。

国語学者の飛田良文さんが調
べたところによると、奈良時代
鎌倉時代のころには、自分の
ことを「あ」とか「わ」とか「わ
れ」と言っていたそうです。

鎌倉時代以降には「わらわ」
「それがし」「拙者」「手前」と
言っていたそうです。

「おれ」という言い方は鎌倉
時代のころから使い始められ、
「わたくし」「わし」は室町時代
のころから、また「おいら」「わ
たし」は江戸時代ごろから使わ
れ出したそうです。なお「ぼく」
は、明治のころからだそうです。
こうみると「おれ」という言
いは歴史も古く、すたれるこ
となく現在まで使われているの
ですね。

